

2022年5月15日（日）主日朝礼拝説教

『さて、陸に上がってみると』井上隆晶牧師
箴言8章32～36節、ヨハネ福音書21章1～14節

①【ヨハネ21章が追加された理由】

ヨハネの福音書は20章で終わっています。20章の最後に「本書の目的」という表題で書かれた目的が書かれているからです。ですから21章は追加された部分でしょう。追加されるには何か目的があるはずですが、まずは物語を読んでみましょう。弟子たちはエルサレムから故郷のガリラヤへ帰ってきました。彼らは湖に漁に出かけます。ペトロが「私は漁に行く」というと、他の六人の弟子たちも「**私たちも一緒に行こう**」とついてきました。ペトロ、トマス、ナタナエル、ヨハネとヤコブ、それに他の二人の合わせて七人です。一晩中漁をしたのですが何も捕れませんでした。何も捕れない漁には、象徴的な意味があります。かつてペトロは、このガリラヤ湖で何も捕れない漁を経験し（ルカ5章）、イエス様の言葉に従って大漁の奇跡を体験した後、「**私について来なさい。人間を取る漁師にしよう**」（マルコ1:18）といわれ弟子となりました。ですから「何も捕れない漁」とは、「信じる人が起こされない」という当時の教会を象徴しています。つまり、この書が追加された目的は一世紀末の迫害の中にある教会を励ます為でした。

夜が明けたころ、イエス様は岸に立っていましたが、弟子たちはそれがイエス様だとは分かりません。イエス様は彼らに声をかけます。「**子たちよ、何か食べるものはあるか。**」弟子たちは答えます。「**ありません**」イエス様はいいます。「**舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ。**」（5～6節）彼らが言われる通りにすると153匹もの魚が取れました。4世紀のヒエロニムスという人は、これは地中海の全ての魚の種類であり、あらゆる人が救われるという意味だと解釈しました。それほど魚が取れたのに「**網は破けていなかった**」のは、どんな人でも受け入れ、何があっても破れない教会を意味しています。ある学者は「舟の左側とはユダヤ人を意味し、右側とは異邦人を意味する」と解釈しています。5世紀のアウグスティヌスはルカ5章では「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい**」（5:4）とだけ言われたのにヨハネでは「**舟の右側に網を打ちなさい**」と言われている。ルカではこの世の伝道を意味し、網の中には良い魚（善人）と悪い魚（悪人）が一緒に入るが、ヨハネでは天国という岸に引き上げられる良い魚（善人）だけを意味している、と解釈しています。面白いと思います。

②【聖なる生活を大切にきなさい】

ここで興味深いのは、舟にいる弟子たちが岸にいるイエス様と対話を始めたことからこの物語は大きく展開し始めたことです。私たちがここから学ぶことは、まずキリストと対話をきなさいということです。つまり聖書を読む、祈ることをし

なさいということです。それらの基本的な生活を抜きにして何も始まらないということです。聖書を読み、祈り、礼拝を大事にする人は悪くなりません。逆にそれらを軽んじる教会は必ず崩壊してゆきます。教会だけでなく、そのような人の人生も必ず崩れて行きます。しかしどんなに落ちても祈りと聖書朗読という聖なる生活に戻るならば、神様はその人の霊を回復させ、健康まで与えられます。私は何度もその奇跡を見てきました。宗教改革というのはルターにしても、ウエスレーにしても、カトリックの第二バチカン公会議にしても、聖なる生活という基本に帰る運動でした。

●私が牧師になろうとした時、母教会にいた赤瀬さんという高齢の男性が私に言いました。「井上君、牧師になろうと思ったら聖書を読むこと、祈ることをやめてはいけませんよ。」それを今でもはっきりと覚えています。だから私はそれに従い、今でも体を釘づけて集会をしているのです。聖なる生活を抜きにして私たちは、成長しません。

③【伝道は神がするものである】

では、聖書を読み、祈っていたらそれだけでいいかということそれだけでは駄目です。舟の弟子たちはイエス様の言う通りに従ったら、大漁になりました。自分が指導者では駄目です。イエス様が指導者にならなければなりません。イエス様の指揮のもと、イエス様に従わなければならないということです。自分中心な信仰生活を送っている人は成長しません。そこには「我」があります。「私の考え、私の計画、私の都合」があると、それがその人を支配し、キリストが支配できません。そういう人は何とも硬い。「これをしなさい」といっても「嫌です」といいます。もっと柔らかくでなければなりません。

●榎本保郎牧師はこう言っています。「結局、私たちの人生が、神の指揮棒によって操られてゆくというような人生が、本当のクリスチャンの人生だと思う。何かこうクリスチャンと言え、自分が愛の業をしたとか、こんなすばらしいことをしたとか、その人の行為というものが非常に尊ばれやすいが、そうではなく、この人がいかに神の指揮棒に従って生きたかということが、クリスチャンの評価の基準である。…人間的に言えばイエスの伝道は失敗であった。…しかしこれが神の御心だと信じたから、あえて十字架の道を歩まれたのである。それが失敗したとかどうかということが問題ではなく、神の指揮棒に従って生きたかどうかが問題なのである。」

神に操られるためには「柔らか」にならねばなりません。

伝道も神の業です。使徒言行録の中にアンティオキア教会で礼拝し、断食していると聖霊が「バルナバとパウロを私のために選び出しなさい。私が前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」（使徒 13：2）と告げ、二人は伝道旅行に送り出されたと書いてあります。私たちはただ神様が用いられる道具なのです。行けと言われれば行くし、お告げがなければ行かなくてよいのです。

●マカーリイは「人間はどんなに偉大で強力でも、神が彼らにさせてくださることしかできません。それ以上のことは何もできません。」と述べています。

この後、「陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」(9節)とあります。一晩中苦勞して魚を取る必要などありませんでした。既に陸にはパンも焼いた魚も用意してあったからです。では何のために苦勞して漁をさせたのでしょうか。つまり私たちは何のために伝道をするのでしょうか。それは信徒を増やす為ではありません。パウロとバルナバが福音を述べ伝えると信じる者と、信じない者に分かれたと書かれています。聖書は「永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。」(使徒13:48)と書いています。信じる人は既に定められているのです。また、教会を大きくするためでもありません。それはある意味自己満足かもしれません。神の御意思次第でしょう。答えは、伝道をすることによって、神様が本当に生きておられることを知り、神様の業を体験する為です。ひと言でいうなら「神を知るため」です。旧約聖書の中に繰り返し出てくる言葉に「～をして栄光を現わす時、あなたがたは私が主であることを知るようになる。」というものがあります。「主を知る」ために、すべての信仰の活動があるのです。教会が大きかろうと小さかろうと、「主の業」が現れなければ意味がないのです。私はこの都島教会で主の業を見ました。また一人一人の信徒にも主の業を見ました。それはすばらしい体験です。

④【キリストに生かしてもらうのが人生の目的である】

イエス様は「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(12節)と言われます。「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。」(21:13)とあります。イエス様は弟子たちの知らないところで、彼らのために炭をおこし、魚を焼き、パンも用意して待っていて下さいました。私たちの人生にも神様が知らない内に、私たちに必要な人を周りに置いて下さったことを感じます。自分でそのような人を捜し出し、自分の周りに置くことは出来ないからです。試練もありますが、助けもあります。失うものもありますが、必要なものは全て十分与えられてきました。最近ではこの世の物がもう十分すぎて入らなくなりました。でも中には感謝できない人もいるでしょう。それは、恵みが見えていないのです。私は地上で何かを失っても主に感謝します。自分の罪深さにもかかわらず、キリストの命と愛という最上(最大)の物をいただいたのです。お釣りが来ます。この岸辺での食事は、天国での食事を主が用意してくださっているように感じます。面白いことに、聖書は木の実を食べる物語で始まり、「イエス様の手からいただくパンを食べる物語」で終わっています。それは人生の目標は、キリストと出会い、彼の手から永遠の命をいただいて、生かされることであると教えているのです。人はこの世でも、来世でも自分の力では生きられません。私が未熟児で半年保育器の中にいた時、自分の力では生きられませんでした。それは実は今でも同じ、来世でも同じなのです。でもイエス様は私を天国の岸で待っていて下さり、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」といって、パンを下さいます。この方の手からいただく命のパンは何という力、何と美しいものでしょう。私は来世でも永遠に生きる

のです。彼が私を望まれ、私を永遠の愛で愛し、私をご自分の命で生かされるからです。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」この言葉を味わい、天国の岸を思いながら、平安な心で生きましょう。